個別組織と全体組織

足　立　潔　史

現在までに結成された日食観測の組織は、日食があるたびに便宜的に結成され、終ると自然消滅して又別の機会には別の形で結成されるという、甚だとりとめのない存在だった。所属するメンバーはあちこちに重複しており、グループそのものは有名無実の仮空団体で、ただ過去を回顧する事が主たる目的であるような集りであった。

〔個別組織〕

このようなとりとめのない状態は、その時その時には重大な意味があったのだが、かと言って今それらをまとめて、ひとつの枠に入れようという事は、あまり意味のある事には思えない。労多い割には実利の乏しい事であると思う。

それよりも意見の合う者同志、地域を同じくする者同志、成り立ちを同じくする者同志、それぞれの要因で集まったグループが、協力し合い研究し合って、立派な個別組織を作ってゆく事の方が、はるかに有意義であろう。

学校や会社関係のクラブ活動組織、あるいは地域ごとの天文同好会組織が、今まで以上に力を入れて、日食観測に関する活動をまとめていってもらいたいと思う。

意気の合った仲間なら、三人組でも、四人組でもグループを作って、継続した研究活動ができるなら、名前ばかりの組織を作るより余程意味のある事だと思う。必要なのは名前や形式ではなく、実行する事である。このような個別組織を今後積極的に充実させていっていただきたい。

〔全体組織〕

このような個別組織が多立して、その内容が固ってくるにつれ、注意しなければならない事は、お互いの組織間に排他的な、あるいは封鎖的な動きが生ずる事である。良い意味で研究を競争し、互いに研鑽し合うのは望ましい所であるのだが、功を独占しようとして、他のグループの足を引くような事があっては絶対にならない。常に組織の外に向っても活動が開かれていなければならない。こういう弊害を解消する目的で、個別組織を横に結ぶ全体組織が必要となってくる。全体組織は、ひとつの連絡組織であって、個別組織の間の情報交換を促進し、研究の成果を発表し合い、観測の協力を計り、個々の組織が、より高く発展する事を目的とするものである。すでに１０年を経過したアマチュアの日食観測に今必要となってきたのは、この全体組織であろう。

〔観測機材の共有化〕

年々大型化してゆく観測機材を、個人でそろえてゆくのは大変な負担である。グループでお金を出し合って観測機材を共有するという事は、機材からくる観測の限界を越える手段として当然考えられるだろう。しかしこの有形な資産を共有するという事は、余程しっかりした資産の管理体勢がないとできないものである。組織内の努力によって観測機材の共有化及び観測テーマの共同化を今後の目標のひとつとしていただきたい。

〔情報の共有化〕

一方無形の資産である情報及び研究成果の共有化というのは、全体組織が目ざさなければならない課題であろう。この目的の為に日食情報センターなるものが発足して一年になるが、まだまだ個別組織を横に結ぶ程の重要な役割をしているとは言えない。全体組織の形態がどうあるべきものか、いまだ暗中模索の段階であるが、今後それぞれの個別組織が充実してゆくにつれ、全体組織を盛り上げ、さらにその結果として個別組織に成果が反映されるという、正のフィードバック効果を目ざして努力してゆきたいものである。

〔アマチュアの楽しみ〕

固苦しい組織論はとも角、アマチュアは誰にも規制されず、自分の思ったようにやり、またできる事が第一である。組織のために個人に著しく負担がかかったり、自由な精神が曲げられるような事になっては、元も子もない話である。まず楽しいアマチュアであり、かつ協力によってささえられる組織から、さらに楽しいアマチュア活動が産まれる事が、望ましい姿であろう。それが箕輪先生の長年にわたる、献身的なお力添えに答えるものになると思う。